

2019年2月5日

中根一貴

武田知己

概要

2018年9月17日(月)～20日(木)にかけて、学生9人を引率して、東北被災地研修を行った。引率教員は、中根と武田であるが、蔵田明子研究補助員並びに萩原稔准教授にも同様の役割を果たしていただいた。



2011年の東日本大震災から7年目を迎えた昨年、東北の被災地(福島・宮城・岩手)の現状への関心自体が失われているようにも思われる。しかし、東日本大震災はいまだに過去の出来事になっていない。確かにインフラには多額の予算が投じられ、住宅などの整備が進められているものの、住民の帰還は進んでいない。帰還する意欲を高める条件を欠いているよ

うにもみえる。地域社会の再建は困難な課題となっている。昨年度、EUの輸入規制が緩和されたにもかかわらず、福島の農業や漁業に対する風評被害はいまだに続いている。さらに、近年頻発する自然災害により多くの方が命を落としていることを考えれば、7年前の経験は繰り返し問われなければならない現代日本最大の教訓である。

参加者には、まず、あの惨事を追体験する想像力をもつことを求めた。そして、亡くなられた方々の犠牲の上に、どのような危機管理方策を立てるべきなのか、被災地における生活再建をどのように行うべきなのか、地域社会はそれにどのように関わり、どのような支援と教訓を得るべきなのかなど、この国と我々の社会のかたちをめぐって、多角的に考えてほしいと伝えた。

福島県の視察では、福島第一原子力発電所の視察だけではなく、風評被害の現場を知ることを通じて、津波被害と放射能被害、そして風評被害という三つの被害の複合的問題について考察する計画を立てた。宮城県の視察では、大震災において「いのち」を守ることにについて多角的に考えることになるであろう。両県の視察において、震災による被害や影響を「ひとごと」ではなく「わがごと」として捉えられるようになってほしいと考えた。本企画は被

災地の新聞社と各企業、また被災者の方々のご協力・ご厚意のもと実施されたことを付記しておく。

9月17日（月）



福島県の郡山駅に集合し、研修を開始した。テーマは福島の風評被害についてである。今年はコメと水にまつわる被害をとらえ、コンクールで金賞を受賞している二つの酒蔵を訪問し、この7年の苦労取材した。

また、いわき市では、原発に隣接する富岡町で稲作を再開した農家の方から話を伺った。学生からは、酒蔵の来歴・現状とともに、コメと水にまつわる被害にどのようなものがありうるかを考え、事前準備をしてもらった。浜通り地方の風評被害と実害を知ることを通じて、被害の複合性や地域の違いについて理解するきっかけを得た。



9月18日（火）



二日目は、福島原発視察を行った。2011年3月、東北地方の太平洋沿岸を襲った津波は、福島第一、第二原発をも襲う。その現場を訪れ、その被害の大きさを確認し、そのあとの復興の歩みを確認した。学生からは、原発事故と復興に関する厳しい質問が投げかけられたが、東京電力の担当者からは丁寧な説明があった。

また、その後、富岡町の避難区域の視察をおこない、前日に話を伺った稲作を再開した農家の方の水田を見学した。前日の視察の成果を踏まえて、昨年に居住制限区域を解除された地区をこの目で確認したことは参加学生に感銘を与えたようであった。

9月19日（水）

三日目からは、甚大な津波被害に見舞われた宮城県の各地域を視察し、地域ごとにどのような被害があったのか、そこから学ぶべき教訓は何か、一つ一つの場所において失われた命に思いをはせる試みをおこなった。担当者には、それぞれの場所がどのような場所であるのか（なぜそこに行くのか）を事前に調べさせ、語り部（被災者あるいは親しい方をなくされた方）への質問を準備させた。行程は以下のとおりである。

午前：

荒浜小震災遺構視察 → 慰霊碑・深沼視察
石巻市日和山視察 → 市街地一望後、南浜つなぐ館見学
語り部 高橋さん

午後：

南三陸町内視察 震災アーカイブなど
南三陸いりやどにて、被災と復興の講話
語り部 発災当時の副町長 遠藤氏
語り部 消防団長 阿部氏



9月20日（木）

四日目の行程は以下のとおりである。

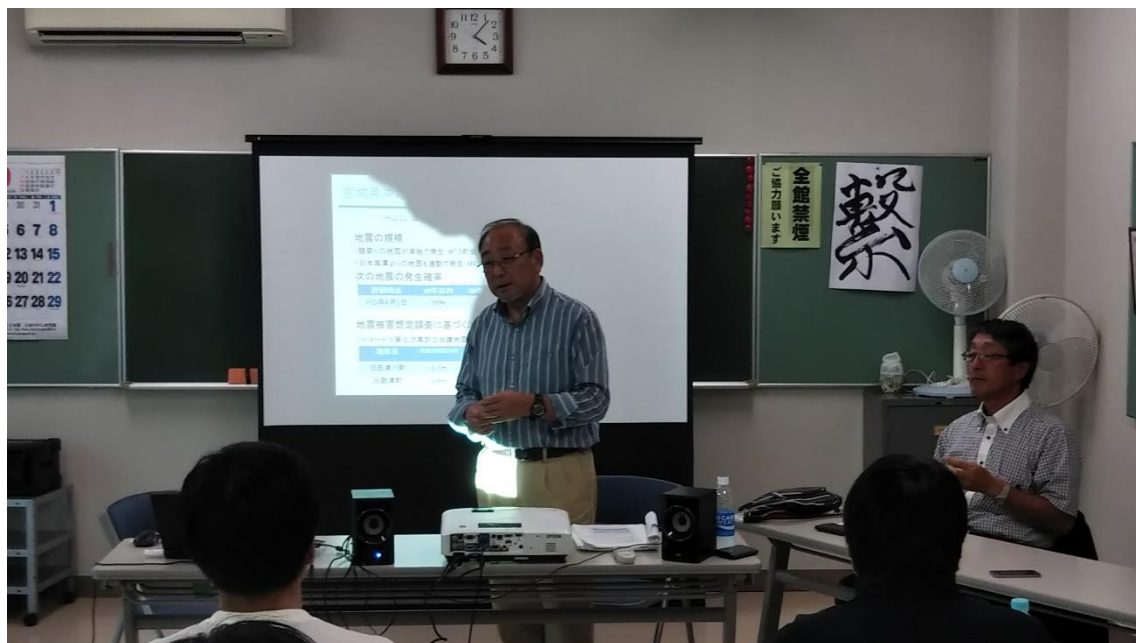
午前：

戸倉小 学校避難の場所視察
大川小 語り部 佐藤さん

女川町 語り部 田村さん夫妻

東松島市野蒜 慰霊碑・伝承館視察

語り部 東松島市役所防災課長 高台移転地視察・説明



宮城県では、現地における語り部の話や津波の被害を受けた地域の視察が参加学生に大きな衝撃をあたえていた。例えば、一般に「成功談」や「美談」として語られていることも、その当事者がむしろ反省や後悔を口にしていた。そのようなときに参加学生は考え込んでいるように見受けられた。なかには質疑応答の時間を超えて、語り部に質問する参加学生もいた。

最後に

今年度は、昨年度に引き続き、福島民友社、河北新聞社の皆様にセッティングなどの面で全面的な協力を得た。記して感謝申し上げたい。地震被害、津波被害、放射能被害、風評被害と多角的に東北地方を襲った被害を学べるこの企画に対する学生たちの関心は必ずしも高くないが、参加した学生の評価は大変高い。こうした良質の研修は今後も継続していく工夫・宣伝をしていきたい。

また、今回は、学生に現地研修で考えが変わったところを意識させた事後報告をさせている。この方式には、一定の効果があるように思う。次年度よりは、学内報告会形式での発表を模索して、参加学生の「まとめる力」「表現する力」の向上を図りたい。

さらに、こうした企画をインターカレッジで実施できないかというのが我々の希望である。来年度はさらなる工夫を施したい。